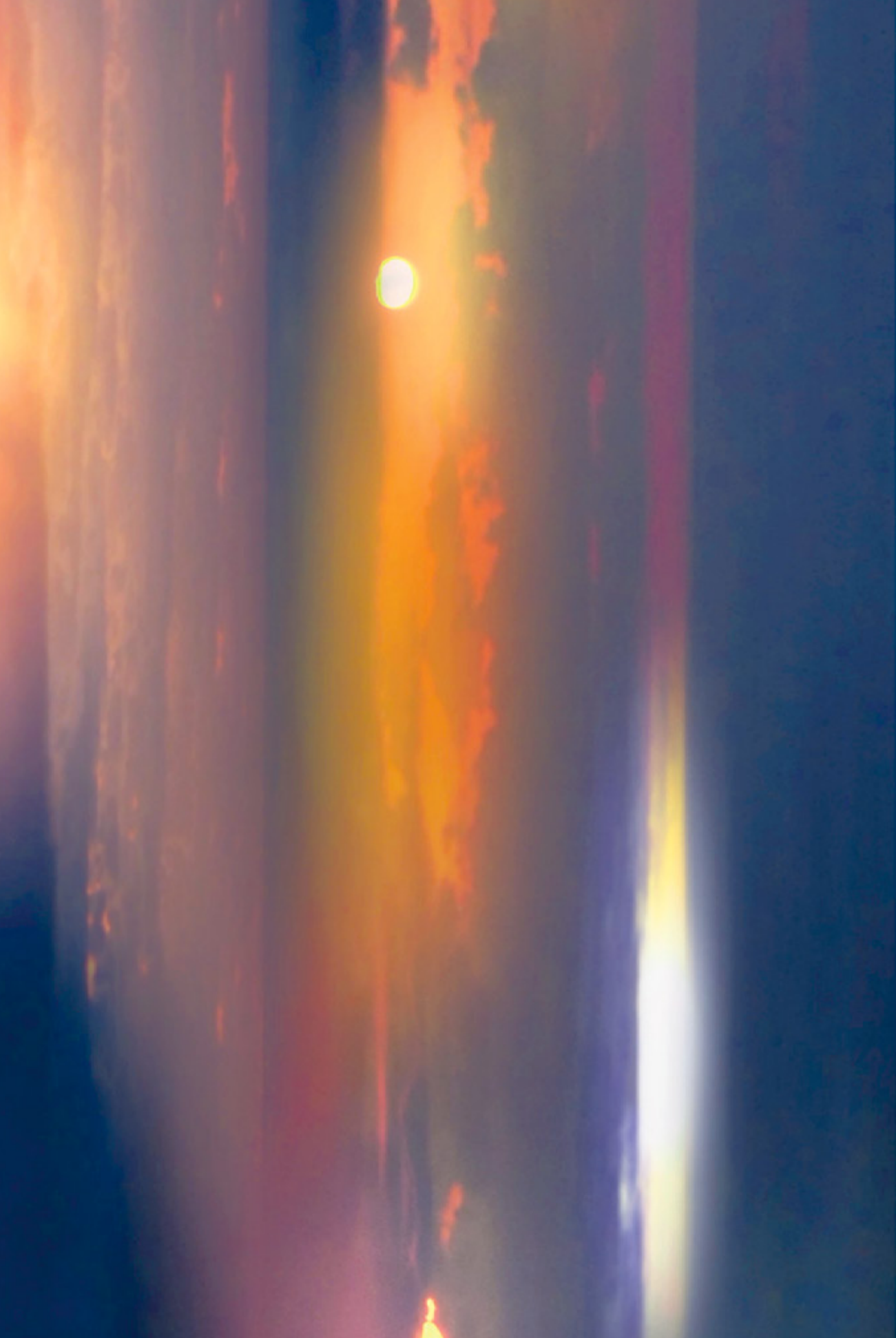


Breath in the Dark

暗闇で呼吸する



THEATER

COMMONS

TOKYO

'25

Kyun-
Chome

Tomoko
Sato

Joana
Hadjithomas
and
Khalil
Joreige
[Lebanon /
France]

Mei
Liu
[China /
the
Netherlands]

Satoko
Ichiara
/Q

Commons
Forum
#1

Commons
Forum
#2

Commons
Tour

René
Pollesch
[Germany]
/Ayaka
Ono
Akira
Nakazawa
Spacenotblank

Commons
Forum
#3

開催概要

都市にあらたな「コモンズ(共有地)」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。第9回目となる今回は、「ブレス・イン・ザ・ダーク／暗闇で呼吸する」をテーマに、演劇や各種パフォーマンス、観客参加型のプログラムなど、都内各所にて開催します。

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なものと複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

シアターコモンズは、港区内に拠点をもつ国際文化機関、ゲーテ・インスティテュート東京、アンステイチュ・フランセ日本、オランダ王国大使館とNPO 法人芸術公社が実行委員会を形成し展開します。

シアターコモンズ '25

会期

2025年2月21日 [金]–3月2日 [日]

会場

東京都内複数会場

主催

シアターコモンズ実行委員会
ゲーテ・インスティテュート東京
在日フランス大使館／アンステイチュ・フランセ
オランダ王国大使館
特定非営利活動法人 芸術公社

助成

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
【芸術文化魅力創出助成】、笹川日仏財団

会場協力

株式会社ワコールアートセンター、港区

ABOUT

A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. Held in various locations in Tokyo, this ninth edition of Theater Commons Tokyo will feature plays, various performances, and audience-participation programs under the theme of “Breath in the Dark”!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater.

By using theater – that is, by applying theatrical ideas – in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery.

Theater Commons Tokyo is organized by the executive committee composed of Arts Commons Tokyo and the following international cultural institutions based in the ward: Goethe-Institut Tokyo, Embassy of France in Japan / Institut français du Japon, and Embassy of the Kingdom of the Netherlands.

Theater Commons Tokyo '25

Date

February 21st – March 2nd, 2025

Venues

Various places in Tokyo

Organized by

Theater Commons Tokyo Executive Committee
Goethe-Institut Tokyo
Embassy of France in Japan / Institut français du Japon
Embassy of the Kingdom of the Netherlands
Arts Commons Tokyo

Supported by

Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan
Foundation for History and Culture, Fondation
Franco-Japonaise Sasakawa

Venue support

Wacoal Art Center, Minato City



ブレス・イン・ザ・ダーク／暗闇で呼吸する

相馬千秋

「大地が震えている。地球のエネルギーによって。あるいは投下された爆弾の破壊エネルギーによって。今この瞬間も、震える大地で、誰かが震えている。寒さに震え、飢えに震えている。怒りに震え、悲しみに震えている。言葉にできないすべての感情に震えている。命が震えている。（…）世界は今、あちこちで裂け、炎症し、激烈な痛みで震えている。」

1年前に書いた文章から、世界は何か変わったのだろうか。何も変わっていないどころか、むしろ構造的暴力はますます拡大し、停戦はおろか、殺戮や人道危機は極限まで達している*。また天変地異や気候変動がもたらす明らかな異常事態も、そういうものだ慣れてしまった感がある。明らかにおかしい、と頭では理解していても、それが異常な現実を何も書き換えていかない無力感にも慣らされてしまっている。アートの世界でも、問題の本質と正面から向き合うことを避ける傾向が空気のように漂ってはいないだろうか。コロナ禍でのトラウマを忘却した先に、世界中で起き続けている炎症に見て見ぬふりをしながら、私たちはどこに向かおうとしているのか。

眩暈しか感じられないこうした状況に対して、私はすでに1年前こう書いている。「芸術に何ができるかという自己証明の問いはほとんど意味をなさない。だが、現実的には何もの術がない状況を受け入れながら、これらの現実を想像し続ける扉を開き続けるために、演劇・劇場の知（ commons ）を使い続けることはできるはずだ。」今回のシアター・コモンズは、この言葉に対する応答として、一年分の葛藤と試行錯誤の結果を恐る恐る共有するタイミングだと言える。

「ブレス・イン・ザ・ダーク ー平和のための呼吸ー」今回のシアター・コモンズの参加作家であるクンチョメが提案する作品タイトルは、この混迷の時代に私たちが実践できる、もっと倫理的かつポジティブな態度を詩的に言い表しているように思われる。呼吸、すなわち息を吸って吐く一連の反応は、人間に限らず、あらゆる動物の営みであり、さらには植物を含むあらゆる生命に

も共通する空気の交換システムだ。「息」は「生き」であり、生まれてから死ぬまで、「息」は私たちの「生き」に寄り添い続けている。だが、巨大な都市開発が進む都市空間で、あるいはAIのテクノロジーが管理社会を隙なく強化・制御する社会で、その「息／生き」自体が構造的に脅かされている。その息苦しさは私たちの声を窒息させ、目を開けば、凄惨な戦下の映像とAIで加工されたフェイクなイメージが、無差別かつフラットに網膜に映り込んでくる……。こうした過剰な視覚刺激が「息／生き」を退化させる時代に、あえて暗闇に身を置いて深い呼吸をすることで、地球と自己、自然と身体、世界と此処の関係を新たに構築することができないだろうか。それは私たちに、文字どおり安息や休息だけでなく、「息／生き」の復活をももたらすはずだ。今回、クンチョメの提案する作品のコンセプトを全体テーマにも使わせていただくことで、「暗闇で呼吸する」という身振りをシアター・コモンズ全体にも敷衍してみたい。

物理的に息の根を止められる脅威にさらされ続けている地域では今、その過酷すぎる現実を記録し伝える以外に、どんな表現があり得るのだろうか。レバノン出身の映画監督・アーティストのジョアナ・ハジトゥーマ&カリル・ジョレイジュは、2007年にパレスチナ難民キャンプの下から出土した、伝説の古代ローマ都市オルトシアのめくるめく物語を舞台に上げる。1,500年前の津波によって消失した古代都市の地層の上に、1948年のナクバによって生じたパレスチナ難民キャンプが覆い被さり、そこが戦闘によって破壊されることで皮肉にも古代と現代がつながる。このように矛盾と眩暈に満ちた現代の中東の裂け目から、私たちはどんな未来への切実な願いを汲み上げることができるのだろうか。

ともに呼吸すること自体が禁じられたコロナ禍の辛い記憶は、忘却と消去の対象でしかない。だが中国出身のアーティスト、メイ・リウは中国全土での強制ロックダウンでのトラウマや悲劇を、自らのレクチャーパフォーマンスによって未来投機的なフィクションへと昇華させる。コロナ禍で多くの人類が経験した「待機の時間」

は、未来においてあり得るかもしれない「もう一つの世界」へとつながっている。現実とフィクションのあわいから立ち現れるパフォーマンスは、経験を克服し未来への希望へとつなぐ、アジアの新世代のナラティブを感じさせるものになるはずだ。

これまで3年にわたり港区エリアでのリサーチを通じて「オバケ東京のインデックス」を積み重ねてきた佐藤朋子は、今回いよいよ、東アジア史の痕跡から東京を捉え直すパフォーマンスとウォークを提案する。日本自体がアジアを襲う「オバケ」であった植民地支配の痕跡は、その被害者ないし加害者の手によってどのように残され、消され、東京という都市空間を書き換えてきたのか。これからアジアのゲートウェイとしてさらなるホスピタリティを発揮する港エリアで、複数の視点で東アジアのナラティブを再構築し、蓄積していく新たな挑戦が始まる。

市原佐都子も今回、東アジア、具体的には日本、韓国、香港の俳優とのコラボレーションによって、アジアの同時代が抱えるグローバルな問題や不条理に取り組む。家父長制や資本主義、大量生産・消費システムのひずみから生じる不条理や滑稽さ、そして欲望のグローバルな均一化。人間が作ったシステムの中で失われる人間の動物性やその矛盾を、猫のキャラクター、キティ一家の不条理劇はどのように抉り出すだろうか。

演劇と社会の関係をラディカルに問い続けたドイツの演出家・劇作家ルネ・ポレシュ。ちょうど1年前に急逝した彼の演劇論が凝縮された戯曲に、スペースノットブランクの演出家、小野彩加と中澤陽が挑む。2000年代以降、ポストドラマ演劇を牽引し、演劇界に革新をもたらしたポレシュの予言的な言葉は、混迷の世界に放り出された2025年の私たちに、どう突き刺さるのだろうか。ぜひその言葉を一緒に声に出して読むことで体感していただきたい。

また今回も3つのフォーラムの開催を通じて、複数の参加作品やアーティストに通底する問題意識や社会課題について、横断的な議論を開く。フォーラム1では、「演劇とケア」をテーマに、演劇という経験が、個の心身のケアや居場所とどのような関係にあるのか、セラピーや宗教にも隣接する領域をも開拓する芸術実践例を交えて考察する。来たるべき劇場は、現代社会にいかに相互ケアの実践場や居場所として機能しうなのか、未来のヴィジョンをともに紡ぎたい。フォーラム2では「演劇と社会」と題し、演劇というメディアと社会変革の可能性について、この問いに真摯に向き合い続けたルネ・ポレ

シュの演劇理論を振り返りながら討議する。フォーラム3では、「演劇と東アジア」というテーマのもと、同時代の演劇の作り手たちが、東アジアにおけるリアリティや歴史とどのように向き合いながら演劇を制作しているのか、その現在地を確認する議論を行いたい。

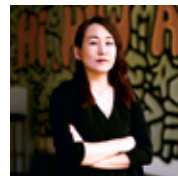
また、集団でシアター・コモンズを体験する企画として前回大好評だった「コモンズ・ツアー」を、今回も2週末にわたり実施する。シアター・コモンズの演目やアーティストのトークを集団で鑑賞するのみならず、その前後の移動やナビゲーターや参加者同士のおしゃべり、記念撮影など、シアター・コモンズを能動的かつ横断的に楽しむツアーとなる予定だ。ぜひご参加いただきたい。

2017年から毎年開催されてきたシアター・コモンズは、今回で9回目となる。インディペンデント・ランのプロジェクトとして、公共、民間、諸外国文化機関から複合的にファンドレイズをし、そこにチケット収入を加えた総予算で運営してきた。今回、これまで支援を受けてきた助成金の一つが不採択となり、予定していたプログラムを大幅に縮小・変更、さらにチケット料金も通常より高めに設定せざるを得ない状況となった。それでも赤字を負いながら実施するインディペンデント・ランの意思と責任を再確認するとともに、次なる10年に向けて、新たなヴィジョンと戦略を考えるタイミングと捉えている。2017-2019年の創設期、2020-2023年のコロナ期を経て、これまで蓄積されてきた「演劇のコモンズ」をより社会の中で実装する次のフェーズが始まっている。それがこの先具体的にどのような形をとるかについて、次回10周年で明らかにできるよう、準備を進めていきたい。今回のシアター・コモンズは次なる10年に向けて、過渡期の暗闇の中で、深い呼吸とともに、幕を開ける。

*この文章は2025年1月上旬に執筆されたものです。

プロフィール

相馬千秋（そうま・ちあき）| NPO法人芸術公社代表理事・アートプロデューサー。東京藝術大学大学院美術研究科准教授。領域横断的な同時代芸術のキュレーション、プロデュースを専門としている。プログラム・ディレクター、キュレーター等を務めた芸術祭として、フェスティバル/トーキョー（2009-2013）、あいちトリエンナーレ2019、国際芸術祭あいち2022、シアター・コモンズ（実行委員長兼任、2017-現在）、世界演劇祭テアター・デア・ヴェルト2023等がある。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章、2021年文化庁芸術選奨・文部科学大臣賞新人賞（芸術振興部門）受賞。



©NOI CREW

Director's Note

Breath(ing) in the Dark

Chiaki Soma

“The ground is shaking. It’s the energy of the earth; it’s the destructive energy of dropping bombs. And at every moment, somebody stands upon this ground, shaking. They are shaking from cold, shaking from hunger. They are shaking in anger, they are shaking in grief, they are shaking from all the indescribable feelings bottled up inside. Life itself is shaking. [...] The world is tearing apart everywhere, inflamed and shaking in severe pain.”

Has the world changed at all since I wrote these words a year ago? Far from it: structural violence has further escalated, and we have reached a breaking point in the severity and number of massacres and humanitarian crises, let alone any hopes of a ceasefire.* We have also become accustomed to clearly abnormal situations caused by catastrophic natural disasters and climate change, brushing them aside as “just the way it is.” Even if we rationally understand that something is clearly not right, we have been made to succumb to a sense of helplessness that does nothing to rewrite this abnormal reality. Even in the art world, it feels as though this tendency to avoid confronting the underlying issue permeates like air. Having thrown our trauma of the coronavirus pandemic into oblivion, we pretend not to see the endless inflammations experienced all over the world. Where exactly are we aiming to go?

In response to this constant, ubiquitous disorientation, even a year ago I had written: “It is virtually meaningless to pat ourselves on the back by asking what art can do [...] However, we can still harness the wisdom (commons) of theater (spaces) to continue opening imagination’s door for these realities, while also realistically accepting the fact that we are at a loss.” In some ways, this year’s Theater Commons Tokyo responds to these words as we cautiously share the outcome of a year’s worth of trial and error and conflicted feelings.

Participating artist duo Kyun-Chome’s performance title, *Breath in the Dark for Peace*, resounds as a poetic expression of the most ethical and positive approach that we can practice in these tumultuous times. Breathing—the series of motions to inhale and exhale—is an act shared by all animals, not simply humans. Going further, it is a system of air exchange that involves plants as

well, and all forms of life. “Breath” (*iki* [息]) is “life” (*iki* [生き]), and our breath sustains our life from birth to death. However, this very structure is at risk in urban spaces that continue to be developed into megacities, or “managed societies” intensified in nature and meticulously controlled by AI technologies. We suffocate under this stifling state, and, upon opening our eyes, our vision fills with indescribable videos of war and fake AI-generated images, indiscriminately shown with equal weight. At a time when such visual overstimulation furthers the deterioration of our “breath/life,” can choosing to breathe deeply in the dark help us attempt to build new relationships between the self and earth, body and nature, here and world? In addition to providing a sense of rest and solace, this gesture will surely revive our “breath/life.” Adopting Kyun-Chome’s artistic concept as this year’s overall theme, we attempt to amplify the act of “breathing in the dark” throughout Theater Commons Tokyo.

What kind of artistic expression is possible today for those who come from regions where people are under the constant threat of actual suffocation (extinction), apart from documenting and sharing their unbearable realities? Lebanese filmmakers and artists Joana Hadjithomas and Khalil Joreige present the story of Orthosia, a legendary Roman city that was unearthed below a Palestinian refugee camp in 2007. The ancient city had vanished due to a tsunami over 1,500 years ago, its stratum covered by the Palestinian refugee camp, which was born out of the Nakba in 1948. With the camp’s destruction in war, the ancient past is ironically connected with the present. What poignant wish for the future can we gather from the fissures of today’s Middle East, filled with contradictions and disorientations?

Our painful memories of the pandemic, during which we were prohibited from simply breathing together, have been merely reduced to oblivion and erasure. Yet the artist Mei Liu confronts the traumas and tragedies experienced across her home country of China during the mandatory lockdown, sublimating them into a work of speculative fiction through a lecture performance. The “wait time” that many experienced with the pandemic connects to “another world” that could exist in the future. Emerging from a liminal space between fiction

and reality, Liu’s performance delivers a narrative that represents Asia’s new generation, seeking to overcome past experiences to connect with a sense of hope for the future.

For the past three years, Tomoko Sato has developed *Index for Obake Tokyo*, a series based on her research of the Minato area. In her latest installment, she presents a walking performance that re-examines Tokyo through historical traces of East Asia. How have the vestiges of Japan’s colonial occupations—wherein the country preyed upon Asia as a “ghost”—been kept and erased by its victims and perpetrators, rewriting the urban space that is Tokyo? As the Minato area further develops into a welcoming gateway to Asia, Sato embarks on a new challenge to reconstruct and layer multiperspective narratives of East Asia.

In this year’s contribution, Satoko Ichihara also tackles the global issues and absurdities that Asia faces today, in collaboration with actors from Japan, South Korea, and Hong Kong. In this work, she interrogates the structures of capitalism and patriarchy, the nonsense and farce of our distorted system of mass production and consumerism, and the global homogenization of desire. How will this absurdist play—featuring a cat named Kitty and its family—pierce through our human animality, which continues to vanish under our self-made systems, and the contradictions that it encompasses?

The German theater director and playwright René Pollesch radically confronted the relationship between theater and society throughout his career. Marking exactly a year after his sudden passing, Ayaka Ono and Akira Nakazawa from Spacenetblank take on the challenge of performing a play that encapsulates his dramatic theory. How will the prophetic words of Pollesch—a groundbreaking artist who led the field of postdramatic theater in the 2000s—speak to us now, in 2025, as we are thrown into a volatile world? We invite you to experience his words firsthand by joining us in reading them aloud.

In line with previous years, we present three forums to facilitate multidisciplinary discussions around critical and social issues that underlie many of the participating performances and artists’ practices. Commons Forum #1 “Theater and Care” examines the relationship between engaging in theater and caring for one’s mental and physical well-being—as well as finding a sense of belonging—incorporating examples of artistic practices that even delve into realms adjacent to therapy and religion. We hope to collectively envision future possibilities for theaters to provide practical spaces of mutual care and where people can feel they are seen and heard. In Commons Forum #2 “Theater and Society,” we consider the

potential of theater as media to enact social change, reflecting on the dramatic theory of René Pollesch, who was committed to confronting this question. In Commons Forum #3 “Theater and East-Asia,” we focus on how contemporary artists in East Asia are currently grappling with the realities and histories across the region in creating theatrical works.

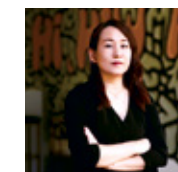
The “Commons Tour,” which was well-received as an endeavor to collectively experience Theater Commons Tokyo, will also be revived across two weekends. The tour will provide an opportunity to actively enjoy the festival in various ways as a group, beyond attending the performances and artist talks. This will include conversations with the guides and fellow tour-goers before and after the programs, as well as photo ops. We hope many of you will join us.

Held annually since its inception in 2017, Theater Commons Tokyo enters its ninth edition this year. As an independently-run project, we have operated with a total budget based on fundraising across public, private, and foreign cultural institutions, in addition to ticket revenues. This year, we were denied funding from one of the grants that had been consistently supporting us, which led to drastic cuts and changes in our scheduled program, as well as an unfortunate yet unavoidable necessity to increase the ticket fee. While this situation reconfirmed my sense of responsibility in and commitment to running an independent festival despite being in the red, I also view this as a moment to think about our new vision and strategy for the next decade. From the festival’s initial stages of 2017–2019 to the pandemic era of 2020–2023, it now begins to enter its next phase, in which we implement the “Theater Commons” that have accumulated throughout these years more deeply into wider society. We hope to work towards revealing a concrete vision for these plans at our 10th anniversary edition next year. Breathing deeply amid a transitional darkness, Theater Commons Tokyo ’25 raises its curtain as it looks toward the upcoming decade.

*This text was written in early January 2025.

Profile

Chiaki Soma | Representative Director of NPO Art Commons Tokyo, art producer. Associate Professor at the Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts. Specializes in curating and producing work that crosses the interdisciplinary boundaries of contemporary art. The main art festivals he has served as program director or curator include “Festival/Tokyo” (2009–2013), “Aichi Triennale 2019” and “Aichi Triennale 2022”, “Theater Commons Tokyo” (also serving as executive committee chair, 2017–present), and “Theater der Welt 2023” (Germany). In 2015, he was awarded the French Order of Arts and Letters Chevalier, and in 2021 she was awarded the Art Encouragement Prize of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.



©NOI CREW

シアターコモンズ '25

Theater Commons Tokyo '25

page

02	開催概要
04	ディレクターズ・ノート
08	目次
09	プログラム
33	会場
34	スケジュール
36	クレジット

page

03	About
06	Director's Note
08	Contents
09	Programs
33	Venues
34	Schedule
36	Credit



Photo: Ryohei Yanagihara

キュンチョメ Kyun-Chome

ブレス・イン・ザ・ダーク — 平和のための呼吸 — *Breath in the Dark for Peace*

参加型パフォーマンス

Participatory Performance

日時

2月21日 [金] 16:00 / 19:00
2月22日 [土] 16:00 *リラックスパフォーマンスの回 / 19:00
2月23日 [日] 12:00 / 19:00
2月24日 [月・祝] 12:00 / 19:00
2月28日 [金] 16:00 / 19:00
3月1日 [土] 16:00 / 19:00
3月2日 [日] 16:00 *リラックスパフォーマンスの回 / 19:00

Dates

February 21st [Fri] 16:00 / 19:00
February 22nd [Sat] 16:00 *Relaxed performance / 19:00
February 23rd [Sun] 12:00 / 19:00
February 24th [Mon] 12:00 / 19:00
February 28th [Fri] 16:00 / 19:00
March 1st [Sat] 16:00 / 19:00
March 2nd [Sun] 16:00 *Relaxed performance / 19:00

上演時間

約70分

Performance times

Approx. 70 min.

会場

みなと commons 4F
〒108-0014 港区芝5-28-4

Venue

4F Minato Commons
5-28-4 Shiba, Minato-ku, Tokyo 108-0014

チケット

一般 | 3,000円 / 学生 | 2,500円
*要予約、自由席

Ticket

Adults | 3,000 yen / Students | 2,500 yen
*Booking essential, non-reserved seat

暗闇の中で呼吸の奥へダイブする 究極にシンプルで新しい、幸せの形を探る参加型パフォーマンス。

Diving deep into our breath in the dark,
an astonishingly simple participatory performance that explores the shape of happiness.

芸術を「新しい祈りの形」として捉え、詩的でユーモアあふれる作品を世界各地で制作するキュンチョメ。近年は特に海と呼吸に焦点を当て、2024年にはみなと commons で「呼吸」をテーマとした連続ワークショップを開催した。

シアター commons '25では、この取り組みをさらに発展させ、観客が暗闇の中で自分の呼吸を探る体験型パフォーマンス『ブレス・イン・ザ・ダーク — 平和のための呼吸—』を発表する。本公演では、キュンチョメが海で身につけた呼吸法やヨガの伝統的な呼吸法を取り入れ、身体の内側と外側がつながる瞬間を創造することで、新しい幸せの形を提案する。

吸って、吐く。20億年前から途切れなく続いてきたこの行為は生命の基本であり、私たちにとって最も重要な行為の一つだ。「呼吸」という全生命の根源的活動を通して、自分自身、他者、他生物、地球、宇宙とのつながりを知覚し直す。

上演言語

日本語

Language

Japanese

アクセシビリティ

リラックスパフォーマンスの回を実施。
実施日程：2/22 [土] 16:00、3/2 [日] 16:00
*通常の照明よりも明るい状態で体験いただけます。
*上演中の入退場は自由です。
*大きな音の出る場面はありません。
*6歳以上参加可能

Accessibility

Relaxed performance sessions
Dates: February 22nd [Sat] 16:00, March 2nd [Sun] 16:00
*The performance can be experienced in a slightly brighter state than usual.
*Entry and exit during the performance is free.
*No loud noises during the performance.
*Children aged 6 and over are welcome to participate.

ウイスキー (音声) 日英通訳対応あり
字幕言語 | なし 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ |
筆談器、紙台本・台本タブレット当日貸出
椅子・車椅子での参加可能 (リラックスパフォーマンス以外の回も可能です)

Whispering (audio) interpretation available in Japanese and English
Subtitles | None Audio guide | None
Additional accessibility |
Writing devices, paper scripts, and tablet devices available for loan on the day
Chair/wheelchair accessibility (also available for non-relaxed performance sessions)

注意事項

*公演中はマットの上に胡座等で座ることになるため、パンツスタイルでお越しください。
*推奨年齢：中学生以上 (小学生の方はリラックスパフォーマンスの回にご参加ください)

Please note

*To wear slacks as you will be sitting cross-legged on a mat during the performance.
*Recommended minimum age: 12 years old (school children may attend the relaxed performance).

クレジット

構成・演出 | キュンチョメ
パフォーマンス | 佐々木愛 (中野成樹+フランケンズ)
会場協力 | 港区

Credit

Concept and direction | Kyun-Chome
Performer | Ai Sasaki (Shigeki Nakano + Frankens)
Venue support | Minato City

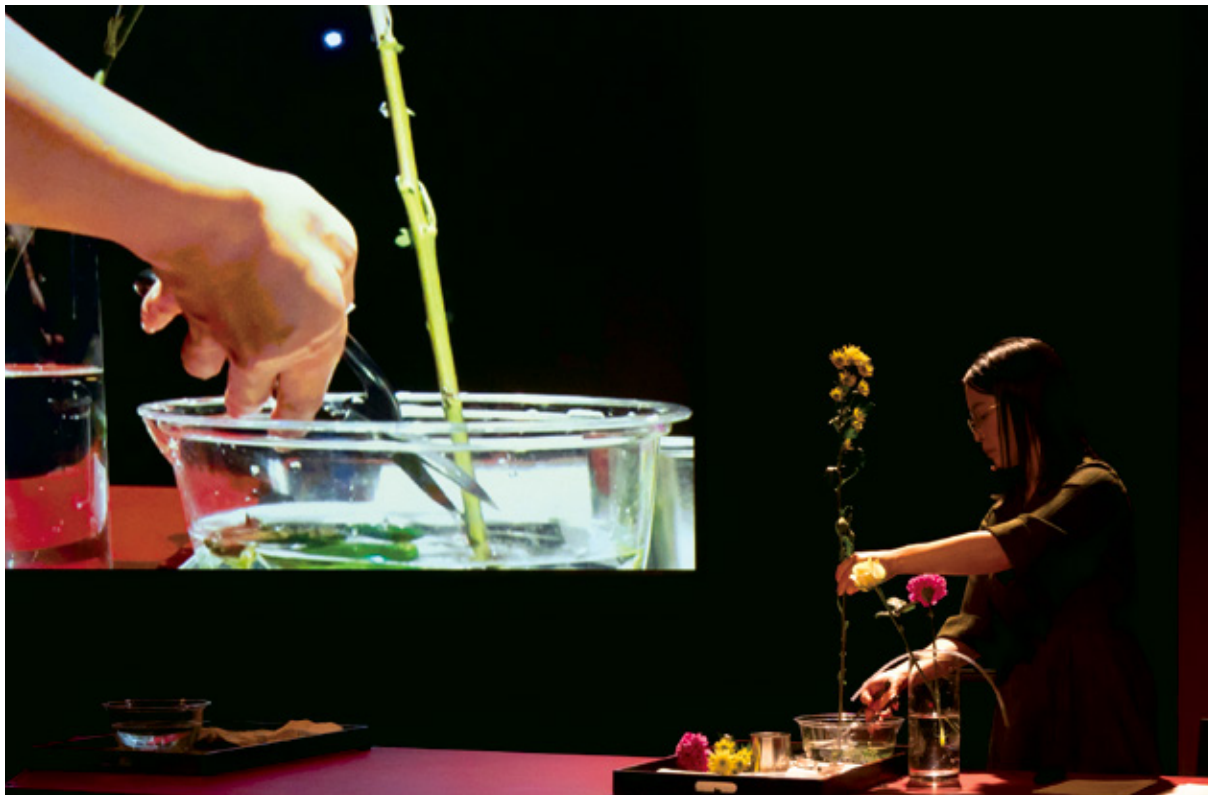
プロフィール

キュンチョメ | ホンマエリとナブチのユニット。2011年の東日本大震災を機に結成。国内外の様々な場所で、社会的な分断や複雑さに対して、自らの身体を媒介にした映像作品やプロジェクトを多数制作している。近年の主な展覧会に「魂の色は青」(黒部市立美術館、2023)「六本木クロッシング2022：往來オーライ!」(森美術館、2022)、「現在地：未来の地図を描くために [1]」(金沢21世紀美術館、2019)、「あいちトリエンナーレ2019」などがある。

Profile

Kyun-Chome | An art unit consisting of Eri Honma and Nabuchi. Formed in response to the 2011 Great East Japan Earthquake, they have produced a number of video works and projects in various locations, using their own bodies as a medium to address social divisions and complexities. Recent major exhibitions include “The Color of the Soul is Blue” (Kurobe City Museum of Art, 2023), “Roppongi Crossing 2022: Coming & Going” (Mori Art Museum, Tokyo, 2022), “Current Location: To Draw a Map of the Future [1]” (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, 2019), and “Aichi Triennale 2019” (Aichi, 2019).





©シアターcommons '23 / 撮影:佐藤駿

佐藤朋子 Tomoko Sato

オバケ東京のためのインデックス 東アジア編 Index for Obake Tokyo: East Asia Chapter

日時

2月21日 [金] 14:00
2月23日 [日]–24日 [月・祝] 14:00
2月28日 [金] 14:00
3月1日 [土] 14:00

上演時間

約70分

会場

みなと commons 地下1F
〒108-0014 東京都港区芝5-28-4

チケット

一般 | 3,000円 / 学生 | 2,500円
*要予約、自由席

上演言語

日本語

Dates

February 21st [Fri] 14:00
February 23rd [Sun]–24th [Mon] 14:00
February 28th [Fri] 14:00
March 1st [Sat] 14:00

Performance times

Approx. 70 min.

Venues

B1F Minato Commons
5-28-4 Shiba, Minato-ku, Tokyo 108-0014

Ticket

Adults | 3,000 yen / Students | 2,500 yen
*Booking essential, non-reserved seat

Language

Japanese

レクチャーパフォーマンス+ウォーク

Lecture Performance + Walk

東アジア史の痕跡から出会い直す、東京の「オバケ」とは。 いよいよ都市空間に繰り出す、シリーズ第4弾。

What kind of ghosts will we revisit through traces of East Asia in Tokyo?
The series finally heads into urban space for the fourth installment.

都市の歴史や記憶のリサーチから出発し、自らの身体を媒介としたレクチャーパフォーマンスとして出力するアーティスト、佐藤朋子。2021年から制作・発表を続けているシアターcommons委嘱シリーズ「オバケ東京のためのインデックス」では、前衛芸術家の岡本太郎による「オバケ都市論」を起点に、これまでにゴジラ、カラス、生け花等の「非人間」の視点を通して、都市の「オバケ」的な記憶を浮かび上がらせ、もう一つの東京を構想するためのインデックスを作りためてきた。

4作目となる今回は、台湾や韓国での長期レジデンスを経て、東京に残る植民地時代の東アジアの僅かな痕跡から東京を捉え直す。そこで再び登場するゴジラは、この巨大都市の「オバケ」をいかに映し出すのだろうか。さらに、実際に街に出てその痕跡を辿る「ウォーク」を実施。観客たちは、まだ見ぬ東京の「オバケ」に出会い直すことになるはずだ。

Using her body as a medium, artist Tomoko Sato creates lecture performances based on research into the history and memories of cities. *Index for Obake Tokyo*, a Theater Commons commission that she has been producing and performing since 2021, takes avant-garde artist Taro Okamoto's "Obake Tokyo" urban theory as its starting point. In the series, Sato has developed an index for envisioning another Tokyo by revealing its "ghostly" memories through the non-human perspectives of Godzilla, crows, and ikebana.

After participating in long-term residencies in Taiwan and South Korea, the fourth installment sees the artist re-examining Tokyo through the traces of East Asia that remain in the city from the colonial period. How will Godzilla reflect the "ghosts" of this massive city this time? Sato will also lead walks in the city to explore these traces. The audience is sure to encounter "ghosts" of Tokyo that they have yet to see.

アクセシビリティ

字幕言語 | 英語 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ |
受付で筆談対応可能
車椅子席あり

Accessibility

Subtitles | English Audio guide | None
Additional accessibility |
Written communication support available at reception
Wheelchair-accessible seating available

注意事項

*上演では実際に街中を歩きます。動きやすい服装でお越しください。

Please note

*The performance will involve walking through the city. Please wear comfortable clothing.

クレジット

構成・演出・出演 | 佐藤朋子
日英翻訳 | 池田ケイ恵理子
マップデザイン | 湯田牙
会場協力 | 港区

Credit

Concept, direction and performance | Tomoko Sato
Japanese-English translation | Eriko Ikeda Kay
Map design | Sae Yuda
Venue support | Minato City

プロフィール

佐藤朋子 (さとうともこ) | 1990年長野県生まれ。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。広範なリサーチをもとに物語を構築し、主にレクチャーの形式を用いた「語り」の芸術実践を行っている。近年の活動に、《オバケ東京のためのインデックス》(シアターcommons, 2021-)、《TWO PRIVATE ROOMS – 往復朗読》(青柳葉摘と共同、2020-)、第14回恵比寿映像祭「スベクタクル後」(東京都写真美術館、2022)、「公開制作vol.2 佐藤朋子 狐・鶴・馬」(長野県立美術館、2022)。令和5年度ポラ美術振興財団在外研修員として台湾と韓国にて研修。http://tomokosato.info/

Profile

Tomoko Sato | Born in Nagano in 1990. Received her M.F.A. in Film and New Media from Graduate School of Tokyo University of the Arts. She constructs narratives based on extensive research and engages in artistic practice of "storytelling" mainly in the form of lecture performance. Her recent works include *Index for Obake Tokyo* (Theater Commons Tokyo, 2021-), *TWO PRIVATE ROOMS – A Circle of Reading* (Collaboration with Natsumi Aoyagi, 2020-), Participation in 14th Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions (Tokyo Photographic Art Museum, 2022) and "Public production vol.2 Tomoko Sato White fox, Antigone, Centaurus" (Nagano Prefectural Art Museum, 2022). She studied in Taiwan and Korea as an overseas trainee of the Pola Art Foundation in 2023. http://tomokosato.info/



Photo: Ryusuke Ohno



ジョアナ・ハジトウーマ & カリル・ジョレイジュ [レバノン/フランス]

Joana Hadjithomas and Khalil Joreige [Lebanon / France]

レクチャーパフォーマンス
Lecture Performance

オルトシアのめくるめく物語 The Vertiginous Story of Orthosia

日時

2月24日 [月・祝] 15:00

*ポストトークあり

2月25日 [火] 17:00

Dates

February 24th [Mon] 15:00

*Talk (after the performance)

February 25th [Tue] 17:00

上演時間

約70分

Performance times

Approx. 70 min.

会場

スパイラルホール

〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル3F

Venue

Spiral Hall

3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062

チケット

一般 | 3,000円 / 学生 | 2,500円

*要予約、自由席

Ticket

Adults | 3,000 yen / Students | 2,500 yen

*Booking essential, non-reserved seat

上演言語

英語 (日本語字幕付き)

Language

English (with Japanese subtitles)

1500年の時を経て、パレスチナ難民キャンプの下から出現した伝説の古代都市オルトシア。古代の地層から浮かび上がる、破壊と再生、その未来。

The legendary ancient city of Orthosia appears from beneath a Palestinian refugee camp after 1500 years. Emerging from the ancient earth: destruction, rebirth, and what lies ahead.

レバノン出身で、パリを拠点に活動する映画監督・アーティストのジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュ。カンヌやベルリンなど国際的な映画祭の常連であり、2017年には最も革新的な現代美術作家に与えられるマルセル・デュシャン賞も受賞した彼らは、これまで一貫して、レバノンや中東世界の歴史記述やその物語構築をテーマに作品を作り続けてきた。

その二人が2024年に発表した最新パフォーマンスは、パレスチナ難民キャンプの下から出土した、伝説の古代ローマ都市オルトシアを巡る物語だ。レバノンの北部、ナハル・エル・バーリドの難民キャンプは、2007年の国内武力衝突で破壊されたが、皮肉にもそのおかげで紀元551年の津波によって消失した古代ローマ都市が姿を現した。まさにポンペイに次ぐ考古学的大発見だが、発掘調査は難民たちにとって「第二の強制移住」を強いてしまう。このジレンマから二人は、考古学者との対話や歴史記録を舞台上に召喚し、暴力と破壊が続く中東の地層に、未来へのタイムカプセルを埋め込む。

アクセシビリティ

字幕言語 | 日本語 音声ガイド | なし

その他アクセシビリティ |

受付で筆談対応可能

車椅子席あり

Accessibility

Subtitles | Japanese Audio guide | None

Additional accessibility |

Written communication support available at reception

Wheelchair-accessible seating available

クレジット

企画 | ジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュ

考古学者 | ハディ・シュエリ

リサーチ | マイサ・マートック、メートル・ジュリアン・ゴスブ

撮影 | タラル・フリー、ジョー・サーデ、カリル・ジョレイジュ

映像編集 | ティナ・バス、シベル・ナデル

アニメーション | ロラン・ブルット 3Dアニメーション | マイサ・マートック

音響編集・録音 | シャリフ・アラム、ラナ・イード (Studio DB)

音楽 | シャーベル・ハベール、The Bunny Tylers

スタジオ・マネージャー | タラ・エル・フリー・ミカエル

製作 | Kunstenfestivaldesarts

共同制作 | Points communs – Nouvelle scène nationale de Cergy-Pontoise et du Val d'Oise

協力 | Galerie In Situ – fabienne leclerc

東京公演

会場協力 | 株式会社ワコールアートセンター

助成 | 在日フランス大使館 /

アンスティチュ・フランセ、笹川日仏財団



Credit

A project by Joana Hadjithomas & Khalil Joreige

Archaeologist | Hadi Choueri

Research | Maissa Maatouk, Maitre Julien Ghossoub

Cinematography | Talal Khoury, Joe Saade, Khalil Joreige

Video editing | Tina Baz, Cybele Nader

Animation | Laurent Brett 3D Animation | Maissa Maatouk

Sound editing and mixing | Cherif Allam, Rana Eid (Studio DB)

Music | Charbel Haber, The Bunny Tylers

Studio manager | Tara El Khoury Mikhael

Commissioned and produced by Kunstenfestivaldesarts

Coproduction: Points communs – Nouvelle scène nationale de Cergy-Pontoise et du Val d'Oise

Thanks to Galerie In Situ - fabienne leclerc

Performance in Tokyo

Venue Support | Wacoal Art Center

Supported by Embassy of France in Japan /

Institut français du Japon,

Fondation Franco-Japonaise Sasakawa



プロフィール

ジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュ | 映像作家、アーティスト。写真やインスタレーション、パフォーマンス、映像作品を通じて、イメージや表象の製造、想像の構築、歴史の記述を探索する。受賞作に、『メモリー・ボックス』(原題: "Memory Box", 2021年)、『スミルナ』(原題: "ISMYRNA", 2016年)、『レバノンロケット協会』(原題: "The Lebanese Rocket Society", 2012年)、『私は見たい』(原題: "Je veux voir", 2008年)など。2017年、「Unconformities」プロジェクトでマルセル・デュシャン賞を受賞。ともに、Correspondances、Metropolis、シネマテーク・ペイルートといったレバノンの文化団体に深く関わっている。

Profile

Joana Hadjithomas and Khalil Joreige | Filmmakers and artists, Joana Hadjithomas and Khalil Joreige work with photography, installations, performance, video and film. They question the fabrication of images and representations, the construction of imaginaries and the writing of history. Their award-winning films include *Memory Box* (2021), *ISMYRNA* (2016), *The Lebanese Rocket Society* (2012), *Je Veux Voir* (2008). They received the prestigious Marcel Duchamp Prize in 2017 for their artistic project Unconformities. Joana and Khalil are both very involved in cultural structures in Lebanon such as Correspondances, Metropolis and Cinémathèque Beirut.



Photo: Tarek Moukaddem



ジョアナ・ハジトウーマ & カリル・ジョレイジュ [レバノン/フランス]

Joana Hadjithomas and Khalil Joreige [Lebanon / France]

映画上映

Film Screening

「スミルナ」ほか ISMYRNA and more

日時

2月26日 [水] 19:00 *ポストトークあり
3月1日 [土] 11:30 / 16:30
3月2日 [日] 11:30 / 13:30

Dates

February 26th [Wed] 19:00 *Talk (after the screening)
March 1st [Sat] 11:30 / 16:30
March 2nd [Sun] 11:30 / 13:30

上映時間

『スミルナ』(49分)
『酔った愛たちの石棺』(7分)
『蛮族を待ちながら』(4分)

Screen times

ISMYRNA (49 min.)
Sarcophagus of Drunken Loves (7min.)
Waiting for the Barbarians (4min.)

会場

東京日仏学院 エスパス・イマージュ
〒162-8415 新宿区市谷船河原町15 東京日仏学院 2F

Venue

Institut français de Tokyo, Espace images
2F, Institut français de Tokyo, 15 Ichigaya-Funagawara-machi,
Shinjuku-ku, Tokyo 162-8415

上演言語

フランス語 (英語・日本語字幕付き)

Language

French (with English and Japanese subtitles)

「私たちにとって 語ることは 生き延びることだった」—歴史の継承を巡る問い ジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュの映像作品3本を一挙上映。

“Recounting for us practically meant surviving”

Questioning inherited histories—A screening of three films by Joana Hadjithomas and Khalil Joreige.

レバノン出身で、パリを拠点に活動する映画監督・アーティストのジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュ。今回、スパイラルホールでのレクチャーパフォーマンス『オルトシアのめくるめく物語』の上演に合わせて、作家自身が現在の中東情勢を踏まえてセレクトした映像作品3本を日本初公開する。

映画『スミルナ』(2016)のタイトルは、トルコの都市、現在のイズミルの古い呼び名だ。ここにルーツを持つ作家は、同じく同地にルーツを持つ画家・詩人との対話を通じて、実際には訪れたことのない都市を想像しながら、複雑な地域における歴史の継承について問いを巡らす。同時上映する、停電中のベイルート国立博物館で撮影された『酔った愛たちの石棺』、ギリシャの詩人カヴァフィスの詩とともにベイルートの遠景が移りゆく『蛮族を待ちながら』の鑑賞と合わせて、レバノンを生きてきた作家たちの目とともに、中東の今に思いを馳せてみる特別な時間となるだろう。

Joana Hadjithomas and Khalil Joreige are Lebanese-born film directors and artists based in Paris. In conjunction with their lecture performance *The Vertiginous Story of Orthosia* at Spiral Hall, the duo will present, for the first time in Japan, a selection of three video works that reflect on the current situation in the Middle East.

The film *ISMYRNA* (2016) takes its title from Smyrna, the former name of the Turkish city of Izmir. In conversation, Hadjithomas and a painter and poet raise questions about the complicated inherited histories of Smyrna, while imagining the city that they have never visited, but where both have roots. Together with *Sarcophagus of Drunken Loves*, which was filmed at the National Museum of Beirut during power cuts, and *Waiting for the Barbarians*, in which shifting images of the Beirut landscape are paired with a poem by the Greek poet Cavafy, the screening program will provide a special opportunity to reflect on the Middle East today through the eyes of two Lebanese artists.

チケット

1,000円

*全席自由席

*シアターコモンズ'25の有料プログラム(コモンズ・フォーラム以外)チケットのご提示で、映画上映「スミルナ」ほかを無料でご鑑賞いただけます。

Ticket

1,000 yen

*non-reserved seat

*Ticket holders for the paid programs of Theater Commons Tokyo '25 (excluding the Commons Forum) are eligible to attend the film screening program “ISMYRNA and more” for free.

アクセシビリティ

字幕言語 | 日本語、英語 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ | 受付で筆談対応可能

Accessibility

Subtitles | Japanese and English Audio guide | None
Additional accessibility | Written communication support available at reception

クレジット

監督 | ジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュ
共催 | 東京日仏学院
助成 | 在日フランス大使館/
アンステイチュ・フランセ、笹川日仏財団



Credit

Director | Joana Hadjithomas & Khalil Joreige
Co-organized by Institut français de Tokyo
Supported by Embassy of France in Japan /
Institut français du Japon,
Fondation Franco-Japonaise Sasakawa



プロフィール

ジョアナ・ハジトウーマ&カリル・ジョレイジュ | 映像作家、アーティスト。写真やインスタレーション、パフォーマンス、映像作品を通じて、イメージや表象の製造、想像の構築、歴史の記述を探索する。受賞作に、『メモリー・ボックス』(原題: “Memory Box”, 2021年)、『スミルナ』(原題: “ISMYRNA”, 2016年)、『レバノンロケット協会』(原題: “The Lebanese Rocket Society”, 2012年)、『私は見たい』(原題: “Je veux voir”, 2008年)など。2017年、“Unconformities”プロジェクトでマルセル・デュシャン賞を受賞。ともに、Correspondances, Metropolis, シネマテーク・ベイルートといったレバノンの文化団体に深く関わっている。

Profile

Joana Hadjithomas and Khalil Joreige | Filmmakers and artists, Joana Hadjithomas and Khalil Joreige work with photography, installations, performance, video and film. They question the fabrication of images and representations, the construction of imaginaries and the writing of history. Their award-winning films include *Memory Box* (2021), *ISMYRNA* (2016), *The Lebanese Rocket Society* (2012), *Je Veux Voir* (2008). They received the prestigious Marcel Duchamp Prize in 2017 for their artistic project Unconformities. Joana and Khalil are both very involved in cultural structures in Lebanon such as Correspondances, Metropolis and Cinémathèque Beirut.



Photo: Tarek Moukaddem



メイ・リウ [中国／オランダ]

Mei Liu [China / the Netherlands]

Homesick for Another World

Homesick for Another World

レクチャーパフォーマンス

Lecture Performance

日時

2月24日 [月・祝] 18:00

*ポストトークあり (ゲスト: 志賀理江子 [写真家、アーティスト])

2月25日 [火] 20:00

上演時間

約60分

会場

スパイラルホール

〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル3F

チケット

一般 | 3,000円 / 学生 | 2,500円

*要予約、自由席

上演言語

英語 (日本語字幕付き)

Dates

February 24th [Mon] 18:00

*Talk (after the performance), Guest: Lieko Shiga (photographer, artist)

February 25th [Tue] 20:00

Performance times

Approx. 60 min.

Venue

Spiral Hall

3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062

Ticket

Adults | 3,000 yen / Students | 2,500 yen

*Booking essential, non-reserved seat

Language

English (with Japanese subtitles)

コロナ禍の待機の時間から、あり得るかもしれない「もう一つの世界」へ。
フィクションと現実のあいから立ち現れる、未来投機的パフォーマンス。

From pandemic lockdown to another possible world.

A speculative performance emerges from the edge of fiction and reality.

中国出身で、オランダを拠点に活動するアーティスト、メイ・リウ。映画の拡張としてのパフォーマンスや映像インスタレーションを、独自の世界観とともに展開する気鋭の若手作家として注目を集めている。昨年、ドイツのアーティスト育成プログラム「フォーキャスト・プラットフォーム」の育成アーティストとして選出されたメイは、日本の写真家・志賀理江子のメンターシップのもとレクチャーパフォーマンスを創作、その最新版をワーク・イン・プログラムとして東京で初披露する。

物語は、メイに実際に起こった出来事から始まる。上海での強制ロックダウン初日、メイは母親の助けを借りてアパートから脱出し、海外に向かう。罪悪感と混乱を抱えながら、彼女は知人から強制隔離中の体験をオーラルヒストリーとして収集し、さらには彼らの夢の世界にも分け入っていく。そして物語は、抹消された歴史や現在の大量操作を示唆しながらも、未来にあり得るかもしれない「もう一つの世界」へと開かれていく……。

Mei Liu is an artist from China based in the Netherlands. Through expanded cinematic performances and video installations created via her unique worldview, she is gaining reputation as a spirited emerging artist. Last year, Mei was selected to participate in Forecast, a German artist development platform, where she created a lecture performance under the mentorship of Japanese photographer Lieko Shiga. She will perform the latest work in progress version for the first time in Tokyo.

The story starts with a true, personal experience. On the first day of the mandatory lockdown in Shanghai, Mei escapes from her apartment with the help of her mother and heads overseas. Feeling guilty and confused, she collects oral histories of acquaintances' experiences during the lockdown, even venturing into their dream worlds. Hinting at erased histories and the present-day manipulation of the masses, the story becomes a gateway to "another world" that may exist in the future...

アクセシビリティ

字幕言語 | 日本語 音声ガイド | なし

その他アクセシビリティ |

受付で筆談対応可能

車椅子席あり

Accessibility

Subtitles | Japanese Audio guide | None

Additional accessibility |

Written communication support available at reception

Wheelchair-accessible seating available

クレジット

脚本 | メイ・リウ

共同脚本 | マラズ・ウスタ

出演 | メイ・リウ

メンターシップ | 志賀理江子

助成 | フォーキャスト・プラットフォーム、オランダ王国大使館

*初期リサーチは、オランダ映画アカデミーの「MA Artistic Research in and through Cinema」プログラムの枠組みとして実施

会場協力 | 株式会社ワコールアートセンター

Credit

Script | Mei Liu

Co-writer | Malaz Usta

Performer | Mei Liu

Mentorship | Lieko Shiga

Supported by Forecast Platform, Embassy of the Kingdom of the Netherlands

*Initial research developed within the framework of MA Artistic Research in and through Cinema, Netherlands Film Academy

Venue support | Wacoal Art Center

プロフィール

メイ・リウ | 上海出身でアムステルダムを拠点に活動する映画監督、アーティスト、パフォーマンス制作者。オランダ映画アカデミーで「映画を通じた芸術研究 (MA Artistic Research in and through Cinema)」を学び、アピチャポン・ウィーラセタクンが主催するアマソンのジャングルでの映画ラボに参加。2024年にはフォーキャスト・プラットフォームの支援を受け、志賀理江子をメンターに、リサーチベースのパフォーマンス『Homesick for Another World』を制作。社会の既存のヒエラルキーや相互作用を覆す新しい映画制作の場を目指し、映画制作を通じた政治的・精神的洞察を得るための「フィルムヨガ」を開発中。

Profile

Mei Liu | Mei Liu is a filmmaker, artist and performance-maker from Shanghai who now lives in Amsterdam. She studied MA Artistic Research in and through Cinema at Netherlands Film Academy, participated in the Apichatpong Weerasethakul film lab in the Amazon jungle. She's now supported by Forecast Platform to work with artist mentor Lieko Shiga on her research-based performance *Homesick for Another World*. Mei strives to create new filmmaking spaces that disrupt existing hierarchies and interactions in society. She is developing a 'film yoga' practice to gain political and spiritual insights through filmmaking.

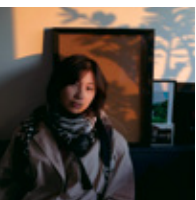




Photo: Dan Bellman

ルネ・ポレシュ [ドイツ] / リーディングパフォーマンス Reading Performance

小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク

René Pollesch [Germany] / Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank

あなたの瞳の奥を見抜きたい、
人間社会にありがちな目くらしの関係
I'm looking into your eyes, social context of deception!

日時

2月26日 [水] 19:00
2月27日 [木] 17:00
2月28日 [金] 14:00 / 17:00 / 19:30
3月1日 [土] 12:00 / 15:00 / 18:00
3月2日 [日] 15:00 / 18:00

上演時間

約90分

会場

ゲーテ・インスティトゥート東京
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

チケット

一般 | 2,500円 / 学生 | 1,500円
*要予約、自由席

上演言語

日本語

アクセシビリティ

字幕言語 | なし 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ |
受付で筆談対応可能
車椅子席あり

Dates

February 26th [Wed] 19:00
February 27th [Thu] 17:00
February 28th [Fri] 14:00 / 17:00 / 19:30
March 1st [Sat] 12:00 / 15:00 / 18:00
March 2nd [Sun] 15:00 / 18:00

Performance times

Approx. 90 min.

Venue

Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

Ticket

Adults | 2,500 yen / Students | 1,500 yen
*Booking essential, non-reserved seat

Language

Japanese

Accessibility

Subtitle | None Audio guide | None
Additional accessibility |
Written communication support available at reception
Wheelchair-accessible seating available

ポストドラマ演劇の旗手ルネ・ポレシュの戯曲に、
小野彩加 中澤陽 スペースノットブランクが原サチコとともに挑む。
観客自身が声に出して体現するリーディングパフォーマンス。
Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank take on a play
by post-dramatic theater legend René Pollesch with Sachiko Hara.
A performance in which audience members will experience through reading aloud.

2000年代以降、ポストドラマ演劇を牽引し、演劇界に革新をもたらした演出家・劇作家ルネ・ポレシュ。2021年ベルリン・フォルクスビューネの芸術監督に就任し、さらなる活躍が期待されていたが、2024年に急逝。世界の演劇界に大きな喪失として受け止められた。彼が切り拓いた演劇と社会をめぐる問いを、私たちはどう受け継ぎ、実践に落とし込むことができるだろうか。

その挑戦を、気鋭の舞台作家、小野彩加 中澤陽 スペースノットブランクが受けて立つ。戯曲『あなたの瞳の奥を見抜きたい、人間社会にありがちな目くらしの関係』は、ポレシュが初演の出演者ファビアン・ヒンリッヒスと親密な共同作業で書き下ろしたモノローグ台本だ。本リーディングでは、複数のポレシュ作品に出演し、日本語上演の翻訳・演出（2010年）も手がけた原サチコとともに、私たち観客自身が声に出して読む。その予言的な言葉は、混迷の世界に放り出された2025年の私たちに、どう突き刺さるのだろうか。

クレジット

作 | ルネ・ポレシュ 演出 | 小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク
出演 | ドラマトゥルク・翻訳 | 原サチコ
協力 | ゲーテ・インスティトゥート東京

プロフィール

ルネ・ポレシュ | 1962年、ドイツ、フリードベルク（ヘッセン州）生まれ。2001-07年、ベルリンのフォルクスビューネ付属ブラーター劇場の芸術監督を務める。2001年に『world wide web-slums』、2006年に『Cappuccetto Rosso』でミュールハイム劇作家賞を受賞。フランクフルト市立劇場、ウィーン・ブルク劇場、ハンブルク・シャウシュピールハウス、ベルリンのフォルクスビューネなど多くの劇場で、自らの戯曲を演出。2021年にベルリン・フォルクスビューネの芸術監督に就任するも、2024年2月26日に急逝する。

小野彩加（おの・あやか）中澤陽（なかざわ・あきら）スペースノットブランク | 二人組の舞台作家・小野彩加と中澤陽が舞台芸術作品の創作を行うコレクティブとして2012年に設立。舞台芸術の既成概念と、独自に研究開発する新しい仕組み（メカニズム）を統合して用いることで、現代における舞台芸術の在り方を探究し、多様な価値創造を試み続けている。固有の環境、関係から生じるコミュニケーションを創造の根源として、クリエイションメンバーとの継続的な協働と、異なるアーティストとのコラボレーションのどちらにも積極的に取り組んでいる。https://spacenotblank.com/

原サチコ（はら・さちこ） | 1964年神奈川生まれ。日本人として唯一のドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイス）公立劇場専属女優。上智大学ドイツ語学科卒。在学中より演劇舎蜚蟬にて演劇を始め、後にロマンチカにて活躍。1999年渡辺和子演出『橋山』でドイツ初舞台。2001年ドイツへ移住。2004年ウィーン・ブルク劇場専属になったのを機にハノーファー、ケルン、ハンブルク、チューリッヒと20年にわたり劇場専属俳優として活躍中。現在はハンブルク・シャウシュピールハウス専属女優として活躍する他、広島原爆伝承活動、パフォーマンス、舞踏、演出、翻訳、講演など日独間の活動も多岐にわたって行っている。

Theater director and playwright René Pollesch was an innovator in the world of theater as a driving force behind the post-dramatic turn of the 2000s. He was appointed as artistic director of the Volksbühne in Berlin in 2021, but his activities were cut short when he passed away suddenly in 2024. The theater world mourned him as a great loss. How can we inherit and put to use the questions around theater and society that he introduced?

The spirited theater artists Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank take on the challenge. *I'm looking into your eyes, social concept of deception!* is a monologue script written by Pollesch in close collaboration with Fabian Hinrichs, a performer in the first production. In this participatory performance, the audience will read the script aloud, joined by Sachiko Hara, a frequent actor in Pollesch's work, and translator/director of a part of his Japanese-language productions (2010). How will Pollesch's prophetic words affect us today, in the tumultuous world of 2025?

Credit

Text | René Pollesch Direction | Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank
Performer, dramaturg and translation | Sachiko Hara
Support | Goethe-Institut Tokyo

Profile

René Pollesch | Born in Friedberg, Hessen, in 1962. From 2001 to 2007, Pollesch served as the artistic director of the Prater at the Berliner Volksbühne. Pollesch was awarded the Mülheimer Dramatikerpreis twice, in 2001 for *world wide web-slums* and in 2006 for *Cappuccetto Rosso*. He directed his own plays at numerous theaters, including the Schauspiel Frankfurt, the Deutsches Schauspielhaus in Hamburg, the Burgtheater Vienna, and the Berliner Volksbühne. He assumed the position of Artistic Director at the Volksbühne Berlin in 2021 but passed away suddenly on February 26, 2024.

Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank | Founded in 2012 as a performing arts collective of Ayaka Ono & Akira Nakazawa which makes dance, theatre and new mechanisms of performing arts. By integrating the established concepts of the performing arts with new mechanisms of their own research and development, they explore the state of the performing arts in the contemporary world and continue to experiment with creating diverse values. With communication arising from the unique environment and relationships at the root of their creation, they are actively engaged in both continuous collaboration with creation members and collaboration with different artists.

Sachiko Hara | Born 1964, Kanagawa. The only Japanese actress exclusively working in public theatres in German-speaking countries (Germany, Austria, Switzerland). Graduated from Sophia University with a degree in German. While still at school, she began acting in theater with the Theatre Company Tourou and later joined Romantica. In 1999 she made her stage debut in Germany in *Narayama*, directed by Kazuko Watanabe, and in 2001 she moved to Germany, where she became an ensemble member at the Burgtheater in Vienna in 2004, and has been an ensemble member for 20 years in Hanover, Cologne, Hamburg and Zurich. She is currently engaged as an ensemble member with the Schauspielhaus Hamburg, and is also involved in a wide range of activities between Japan and Germany, including Hiroshima A-bomb remembrance activities, performance, butoh, directing, translation and lecturing.

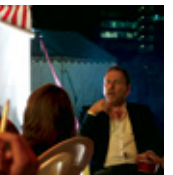
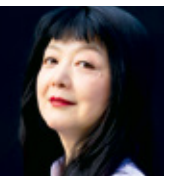


Photo: ladiypinkwater



Photo: Dan Bellman





市原佐都子/Q Satoko Ichihara/Q

演劇公演
Theater

キティ KITTY

日時

3月1日 [土] 14:00 / 19:00
3月2日 [日] 11:30 / 16:30

上演時間

約100分

会場

スパイラルホール
〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル3F

チケット

一般 | 5,500円 / 学生 | 4,000円
*要予約、自由席

注意事項

*推奨年齢：16歳以上、12歳以下入場不可。
*本作には性的・暴力的な表現が含まれます。

上演言語

上演言語 | 日本語、韓国語、広東語 *3言語が混在しています。
字幕言語 | 英語、日本語

Dates

March 1st [Sat] 14:00 / 19:00
March 2nd [Sun] 11:30 / 16:30

Performance times

Approx. 100 min.

Venues

Spiral Hall
3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062

Ticket

Adults | 5,500 yen / Students | 4,000 yen
*Booking essential, non-reserved seat

Please note

*Recommended minimum age: 16 years. Children under the age of 12 not admitted.
*This work contains depictions of sexual and physical violence.

Language

Performance | Japanese, Korean, Cantonese *Three languages are mixed.
Subtitle | English, Japanese

生と性の規範を根底からくつがえす 市原佐都子が放つ“宇宙規模”の最新作。

Completely upending the norms around life and sex,
Satoko Ichihara unleashes a new, “universal scale” work.

社会における不可触なタブーや性をめぐる矛盾を、大胆不敵かつ繊細に問い続ける劇作家・演出家、市原佐都子。今作では家父長制や資本主義、大量生産・消費システムのひずみから生じる不条理や滑稽、そして欲望のグローバルな均一化を、痛烈なQ（クエスチョン）に昇華して突きつける。食べるために生殖を管理される畜産、知らぬ間にハマられてしまう性的な文脈、営利至上主義がもたらす劣悪な労働環境……。幾度も繰り返される「かわいい」のセリフが、玉虫色に意味を変貌させる先に、果たしてユートピアはあり得るのか!?

日本、韓国、香港の俳優陣がくりひろげる懸命かつ批評的ユーモア満載の今作は、現代を生きるすべての者たちへ、取り返しのつかない激震をもたらすだろう。

アクセシビリティ

字幕言語 | 日本語、英語 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ |
受付で筆談対応可能
車椅子席あり

クレジット

作・演出 | 市原佐都子 (Q)
出演 | ソン・スヨン (Creative VaQi)
永山由里恵 (青年団)
バーディ・ウォン・チンヤン (Artocrite Theater)
花本ゆか (はなもとゆか×マツキモエ)
音楽・サウンドデザイン | 荒木優光
衣裳 | 南野詩恵 (お寿司) 舞台美術 | 中村友美
照明 | 魚森理恵 (kehaiworks) 映像 | 小西小多郎
音響 | 土肥昌史*、合田洋祐* 舞台監督 | 川村剛史*
特殊造形製作 | 株式会社バボット
演出部 | 川村智基、興招陽乃、高木沙羅々
ドラマツルク | 熊倉敬聡 英語字幕翻訳 | アヤ・オガワ
音響機材協力 | 株式会社ヤマハサウンドシステム、株式会社ヤマハミュージックジャパン
制作 | 眞鍋隼介、木原里佳*、垣田みづき*
宣伝美術 | ササキエイコ
製作 | ロームシアター京都
*ロームシアター京都
ロームシアター京都 レパートリー作品
会場協力 | 株式会社ワコールアートセンター

プロフィール

市原佐都子 (いちはら・さとこ) | 劇作家・演出家・小説家・福岡国際アートセンター芸術監督。2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2019年『バコスの信女 — ホルスタインの雌』をあいちトリエンナーレにて初演、同作にて第64回岸田國士戯曲賞受賞。2021年、ノイマルクト劇場 (チューリヒ) と共同制作した『Madama Butterfly』をチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シュピラート演劇祭、ウィーン芸術週間にて上演。2023年、『弱法師』を世界演劇祭 (ドイツ) にて初演。高知・豊田・東京を巡演後、2024年にフェスティバル・ド・ドーンヌ・ア・パリ他で上演。

Profile

Satoko Ichihara | Playwright, director, novelist and Artistic Director of Kinosaki International Arts Center (KIAC). Satoko Ichihara has led the theater company Q since 2011. She writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. In 2019, *The Bacchae—Holstein Milk Cows* based on a Greek tragedy, premiered at Aichi Triennale 2019 and won the 64th Kishida Kunio Playwriting Prize. In 2021, she co-produced *Madama Butterfly* with the Theater Neumarkt (Zurich), which was presented at Zurcher Theater Spektakel, SPIELART Theatre Festival (Munich) and Wiener Festwochen. In 2023, *Yoroboshi: The Weakling* premiered at Theater der Welt 2023 (Frankfurt). After a national tour, it was performed at the Festival d'Automne à Paris and elsewhere in 2024.



© Bea Borgers



© Juliette Larochette

コモンズ・フォーラム #1 Commons Forum #1

フォーラム

Forum

演劇とケア Theater and Care

日時
2月23日 [日] 16:00-18:00

上演時間
120分

会場
みなとコモンズ 3F
〒108-0014 東京都港区芝5-28-4

参加方法
無料・要予約

上演言語
日本語 (フランス語逐次通訳付き)

アクセシビリティ
字幕言語 | なし 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ | 車椅子席あり

クレジット
会場協力 | 港区
助成 | 笹川日仏財団



Date
February 23rd [Sun] 16:00-18:00

Performance times
120 min.

Venue
3F Minato Commons
5-28-4 Shiba, Minato-ku, Tokyo 108-0014

How to participate
Free / Booking essential.

Language
Japanese (with French interpretation)

Accessibility
Subtitles | None Audio guide | None
Additional accessibility | Wheelchair-accessible seating available

Credit
Venue support | Minato City
Support | Fondation Franco-Japonaise Sasakawa



若年層の引きこもりや自殺が増加の一途を辿っている日本。そのような社会の中で、いかなる人間もその尊厳や生存が担保される居場所や避難所とはどういう場所なのか。劇場はそのような場所として機能しうるのだろうか。

本フォーラムでは、演劇という経験が、個の心身のケアや居場所とどのような関係にあるのか、アーティストの実践を交えて考察する。引きこもり当事者が遠隔で演劇作品に出演する『HIKU』を創作したアーティスト、エリック・ミン・クオン・カスタン & アンヌ=ソフィ・テュリオンと、「芸術は祈りである」という宣言からセラピーや宗教にも隣接する領域を開拓するキュンチョメ。彼らの芸術実践を例に、劇場が社会の中でいかなるケアと居場所として機能しうるか、その未来形を議論する。

The number of young people who end their own lives or become *hikikomori* (a term for total social recluses) has been steadily increasing in Japan. What does a space of belonging and refuge, where everyone is guaranteed dignity and subsistence, look like in such a society? Is it possible for theaters to function as such places?

In this forum, we incorporate insights from artistic practices to examine the relationship between engaging in theater and caring for one's mental and physical well-being, as well as finding a sense of belonging. The guest speakers are Éric Minh Cuong Castaing and Anne-Sophie Turion, creators of *HIKU*, a theater piece that features actual *hikikomori* people as remote performers, and Kyun-Chome, who propose that art is "a new form of prayer" as they continue to explore artistic realms adjacent to therapy and religion. We discuss future possibilities of the kinds of care and sense of belonging theater spaces can provide in society.

登壇者 / Panelists

*エリック・ミン・クオン・カスタンとアンヌ=ソフィ・テュリオンはオンライン登壇となります。
*Éric Minh Cuong Castaing and Anne-Sophie Turion are participated through the online.

エリック・ミン・クオン・カスタン | 振付家。自身のカンパニー「Shōnen」を創設し、ダンスと新たなテクノロジー（ロボット、ドローンなど）を組み合わせて、社会の現実と根差した協同的な創作活動（病院、NGO、研究機関とのパートナーシップ）を行う。現実／虚構、自然／文化、有機的／人工的といった二元性を探求し、ドラマチック、映像作家、振付家とコラボレーションしている。作品はフランス国内だけでなく国際的に発表され（ポンピドゥー・センター、コメディ・ドゥ・ジュネーブ、MODU劇場 [韓国]）、文化省や複数の財団の支援を受けている。

Éric Minh Cuong Castaing | Choreographer and founder of the Shōnen company, Éric Minh Cuong Castaing combines dance and new technologies (robots, drones) in in socius creative processes rooted in societal realities (partnerships with hospitals, NGOs, research labs). He explores the dualities of reality/fiction, nature/culture, and organic/artificial, collaborating with dramaturges, videographers, and choreographers. His works are presented across France and internationally (Centre Pompidou, Comédie de Genève, MODU Theater [South Korea]), supported by the Ministry of Culture and several foundations.



Photo: Kamila K Stanley

アンヌ=ソフィ・テュリオン | 作家、演出家、パフォーマー。舞台や公共空間のためのパフォーマンスを創作し、一人称の語りから合唱による物語、オブジェや言葉を使い、あらゆる形で親密なものを探求する。彼女のプロジェクトは、変化する伝記的形式であり、私たちはその中で呼吸し、その中に迷い込み、語ることできかないものを聞く。彼女のカンパニーGRANDEUR NATUREはマルセイユを拠点とし、国立舞台マルセイユZefと提携している。

Anne-Sophie Turion | Author, director and performer Anne-Sophie Turion creates performances for stage as well as public space. From the first person to choral narratives, through the use of objects or the spoken word, she explores the intimate in all its guises. Her projects are shifting biographical forms: we breathe in them and get lost in them, hearing things that can't be told. Her company, GRANDEUR NATURE, is based in Marseille and associated with Zef - Scène Nationale de Marseille.



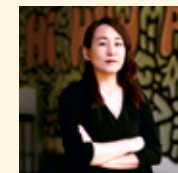
Photo: Éric Minh Cuong Castaing

キュンチョメ | アーティスト

Kyun-Chome | Artist

司会 / Moderator

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ実行委員長兼ディレクター
Chiaki Soma | Chairperson and director of Theater Commons Tokyo



©NOI CREW

通訳 / Interpreter

平野曉人 (ひらの・あきと)
Akito Hirano



photo: ladypinkwater

コモンズ・フォーラム #2 Commons Forum #2

演劇と社会 Theater and Society

日時
2月27日 [木] 19:00–21:00

上演時間
120分

会場
ゲート・インスティテュート東京
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法
無料・要予約

上演言語
日本語

アクセシビリティ
字幕言語 | なし 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ | 車椅子席あり

クレジット
協力 | ゲート・インスティテュート東京

Date
February 27th [Thu] 19:00–21:00

Performance times
120 min.

Venue
Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to participate
Free / Booking essential.

Language
Japanese

Accessibility
Subtitles | None Audio guide | None
Additional accessibility | Wheelchair-accessible seating available

Credit
Support | Goethe-Institut Tokyo

フォーラム
Forum

パンデミックのトラウマが癒える間もなく、世界各地での戦争、トランプ政権の再来、拡散されるフェイクニュースが現実さえも書き換えていってしまう混迷の時代。政治や暴力の「劇場化」も加速する中、演劇は混迷の社会を描くだけでなく、社会や個人の生になんらかの変革をもたらすことは可能なのだろうか。

この問いに真摯に向き合い、ポストドラマ演劇の旗手として演劇界に革命を巻き起こした演出家・劇作家ルネ・ポレシュ（1962–2024）。2021年からドイツ・ベルリンのフォルクスビューネの芸術監督としてさらなる活躍が期待されていた矢先の急逝は、大きな喪失として受け止められた。

本フォーラムでは、ポレシュの演劇理念を振り返りながら、社会と演劇の関係性を討議する。前半はポレシュの演劇実践の革新性を、創作を共にした俳優や研究者の視点から振り返りつつ、後半では第一線で活躍するアーティストを交えて演劇的思考が社会にもたらす変革の可能性を、実践、思想両面から議論したい。

〔第一部〕針貝真理子（東京大学大学院総合文化研究科准教授）、萩原健（明治大学国際日本学部教授）、原サチコ（俳優）

〔第二部〕小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク（舞台作家）、高山明（演出家、アーティスト）

登壇者 / Panelists

針貝真理子（はりがい まりこ）| 福岡県生まれ。演劇学、ドイツ文学・思想。東京大学大学院総合文化研究科准教授。主な論文・著書：『Ortlose Stimmen』（transcript, 2018）、「都市の声、餌食の場所—ルネ・ポレシュ『餌食としての都市』における〈非場所〉の演劇」（『ドイツ文学』156号、2018年所収）、「モノと媒体の人文学—現代ドイツの文化学」（共著、岩波書店、2022年）、「演劇と民主主義」（共編著、三元社、2025年刊行予定）。

萩原健（はぎわら けん）| 1972年東京生まれ。明治大学国際日本学部教授。博士（文学）。専門は現代ドイツ語圏の舞台芸術、および関連する日本の舞台芸術。著書に『演出家ビスカートの仕事』、共訳にフィッシャー＝リヒテ『パフォーマンスの美学』ほか。ドイツ語圏劇団の来日公演等で稽古場通訳、字幕翻訳・制作・操作も務める。2011年のフェスティバルルトークョー11で、ポレシュ作・演出『無防備映画都市 ルール地方三部作・第二部』を担当。

原サチコ（はら さちこ）| 俳優

小野彩加（おの あやか） 中澤陽（なかざわ あきら）
スペースノットブランク | 舞台作家

高山明（たかやま あきら）| 2002年に演劇ユニットPort B（ポルト・ビー）を結成。国内外の諸都市において、ツアーパフォーマンスや社会実験、教育事業や都市プロジェクトの立ち上げなど、多岐にわたる活動を展開している。2013年にPort都市リサーチセンターを設立し、演劇的発想を観光や都市プランニング、教育やメディア開発などに応用する取り組みを行っている。近年では「新・劇場」プロジェクトを始動し、劇場という場の更新を試みている。著書に『テアトロン 社会と演劇をつなぐもの』（河出書房新社）など。

司会 / Moderator

相馬千秋（そうま ちあき）| シアターコモンズ実行委員長兼ディレクター
Chiaki Soma | Chairperson and director of Theater Commons Tokyo

We now live in an age of turmoil amid ongoing wars across the world, Trump’s reelection, and the dissemination of fake news that rewrites our very reality, without a moment to tend to our collective trauma from the pandemic. Is it possible for theater to do more than just depict our tumultuous world and bring about actual change within people’s lives and society?

René Pollesch (1962–2024) was a theater director and playwright who confronted this question throughout his career, revolutionizing the world of theater as a post-dramatic auteur. Having been appointed as the artistic director of Berlin’s Volksbühne in 2021, his sudden passing at the height of his career has been a tremendous loss.

In this forum, we reflect on Pollesch’s ideas on theater as we discuss the relationship between theater and society. In the first half, we look back on his innovative practice through the lens of researchers and actors who collaborated with him. In the latter half, we discuss the possibilities of theatrical thinking to bring forth societal change, both from a practical and theoretical standpoint.

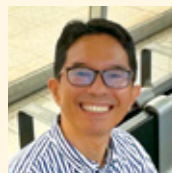
[Part 1] Mariko Harigai (associate professor, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo), Ken Hagiwara (professor, the School of Global Japanese Studies, Meiji University), Sachiko Hara (actor)

[Part 2] Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenetblank (choreographer and theatre maker), Akira Takayama (director, artist)

Mariko Harigai | Born in Fukuoka. Theater studies and German literature/philosophy. Associate professor of Graduate School of Arts and Sciences at the University of Tokyo. Her publications include *Ortlose Stimmen* (transcript, 2018), “Stimmen der Stadt, Ort der Beute: Theater des »Nicht-Orts« in *Stadt als Beute* von René Pollesch” (published in *German Literature*, Issue 156, 2018), *Humanities of Objects and Media: Contemporary German Cultural Studies* (co-authored, Iwanami Shoten, 2022), and *Theater and Democracy* (co-edited, Sangensha, 2025).



Ken Hagiwara | Born in Tokyo in 1972. Professor at the School of Global Japanese Studies at Meiji University. Doctor of Literature. Specializes in contemporary German-speaking performing arts and related Japanese performing arts. Author of *The Work of Director Piscator* and co-translator of Erika Fischer-Lichte’s *Aesthetics of Performance* and others. He also works as a rehearsal interpreter, translating, creating and operating subtitles for guest performances by German-speaking theater companies in Japan. At the 2011 Festival/Tokyo11, he was responsible for the *Cinecittà Aperta - Ruhr Trilogy, Part 2*, written and directed by René Pollesch.



Sachiko Hara | Actor

Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenetblank | Choreographer and theatre maker

Akira Takayama | Akira Takayama formed the creative collective Port B in 2002. He produces a wide range of artworks and projects that include tour-style performances, social experiments, education, and launching urban projects. In 2013, he founded Port Urban Research Center, which applies theatrical methods to tourism, urban planning, education, and media development, among other activities. In recent years, he has initiated the “New Theater” project, attempting to update the theatre as a place. He is the author of *Theatron: What Links Society and Theatre* (Kawade Shobo Shinsha).



© Bea Borgers



©Mei Liu

フォーラム

Forum

コモンズ・フォーラム #3

Commons Forum #3

演劇と東アジア

Theater and East-Asia

日時

3月2日 [日] 14:00-15:30

上演時間

90分

会場

スパイラルホール ホワイエ
〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル3F

参加方法

無料・要予約

上演言語

日本語 (英語逐次通訳付き)

アクセシビリティ

字幕言語 | なし 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ | 車椅子席あり

クレジット

会場協力 | 株式会社ワコールアートセンター

Date

March 2nd [Sun] 14:00-15:30

Performance times

90 min.

Venue

Spiral Hall Foyer
3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062

How to participate

Free / Booking essential.

Language

Japanese (with English interpretation)

Accessibility

Subtitles | None Audio guide | None
Additional accessibility | Wheelchair-accessible seating available

Credit

Venue Support | Wacoal Art Center

東アジアの国々の間での文化交流が盛んに行われるようになって久しい。アニメや漫画、アイドルカルチャーや音楽、ゲームなど多くのコンテンツが共有の文化的基盤を形成され、人々の往来がまだかつてない規模で行われている中、東アジアの舞台芸術の作り手たちは、どのような歴史観やリアリティと向き合っているのだろうか。

韓国、香港、日本の3カ国の俳優たちと3カ国語での演劇制作を試みる市原佐都子、台湾・韓国での長期滞在を経て港エリアの歴史を東アジアの視点から捉え直す佐藤朋子、中国でのパンデミックの強制隔離の経験から過去と未来をつなぐナラティブを立ち上げるメイ・リウ。本フォーラムでは、今回のシアターコモンズで新作を発表する3名のアーティストたちの声を聞きながら、東アジアの演劇制作の現在地を確認する。

For many years now, countries across East Asia have been engaging in robust cultural exchange. As various media content such as anime, manga, pop idol culture, music, and games has formed the basis of a shared culture, and with people traveling between these places at an unprecedented scale, what kinds of realities and historical lenses are East Asian artists in the performing arts grappling with?

Satoko Ichihara embarks on the challenge of creating a trilingual work involving actors from South Korea, Hong Kong, and Japan; Tomoko Sato returns from a long-term stay in Taiwan and South Korea and reframes the history of the Minato area through the lens of East Asia; Mei Liu, uses her experience of the pandemic lockdown in China to weave together a narrative connecting the past and future. As we listen to the voices of these three artists who premiere new works at Theater Commons Tokyo '25, we consider the current state of creating theater in East Asia.

登壇者 / Panelists

市原佐都子 (いちはら・さとこ) | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督
—
佐藤朋子 (さとう・ともこ) | アーティスト
—
メイ・リウ | 映画監督、アーティスト、パフォーマンス制作者

Satoko Ichihara | Playwright, director, novelist and Artistic Director of Kinosaki International Arts Center (KIAC)
—
Tomoko Sato | Artist
—
Mei Liu | Filmmaker, artist, performance-maker

司会 / Moderator

相馬千秋 (そうま・ちあき) | シアターコモンズ実行委員長兼ディレクター
Chiaki Soma | Chairperson and director of Theater Commons Tokyo



コモンズ・ツアー Commons Tour

ツアー

Tour

日時

ツアーA | 2月23日 [日]、24日 [月・祝]

ナビゲーター | 清水知子 (文化理論、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)

鑑賞プログラム |

- ・キュンチョメ「プレス・イン・ザ・ダーク — 平和のための呼吸—」
- ・佐藤朋子「オバケ東京のためのインデックス 東アジア編」
- ・ジョアナ・ハジトゥーマ&カレル・ジョレイジュ
「オルトシアのめくるめく物語」
- ・メイ・リウ「Homesick for Another World」
- ・コモンズ・フォーラム#1

ツアーB | 3月1日 [土]、2日 [日]

ナビゲーター | 平野暁人 (翻訳家・通訳)

鑑賞プログラム |

- ・市原佐都子/Q「キティ」
- ・ルネ・ボレシュ／小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク
「あなたの瞳の奥を見抜きたい、人間社会にありがちな目くらしの関係」
- ・キュンチョメ「プレス・イン・ザ・ダーク — 平和のための呼吸—」
- ・佐藤朋子「オバケ東京のためのインデックス 東アジア編」
- ・コモンズ・フォーラム#3

参加費

要予約 各ツアー

一般 | 15,000円 / U25 | 13,000円

*鑑賞プログラムの予約及びチケット代含む

Dates

Tour A | February 23rd [Sun], 24th [Mon]

Navigator | Tomoko Shimizu (cultural theory, professor of Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts)

Programs |

- *Breath in the Dark for Peace* by Kyun-Chome
- *Index for Obake Tokyo: East Asia Chapter* by Tomoko Sato
- *The Vertiginous Story of Orthosia* by Joana Hadjithomas and Khalil Joreige
- *Homesick for Another World* by Mei Liu
- Commons Forum #1

Tour B | March 1st [Sat], 2nd [Sun]

Navigator | Akihito Hirano (translator/interpreter)

Programs |

- *KITTY* by Satoko Ichihara/Q
- *I'm looking into your eyes, social context of deception!* by René Pollesch / Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank
- *Breath in the Dark for Peace* by Kyun-Chome
- *Index for Obake Tokyo: East Asia Chapter* by Tomoko Sato
- Commons Forum #3

Participation Fee

Booking essential for each tour.

Adults | 15,000 yen / U25 | 13,000 yen

*Ticket and reservation fees for the program are included.

シアターコモンズ'25を集団でアクティブに楽しむ週末限定集中ツアー。 作品鑑賞はもちろん、トークあり、対話あり、記念撮影あり!

A jam-packed group tour of Theater Commons Tokyo '25.

Enjoy a weekend of programs, talks, conversations, and photo ops!

シアターコモンズ'25の複数のプログラムを、効率的に集団で楽しむ2日間の集中ツアー。会期前半・後半それぞれの週末で集中的に作品鑑賞をするだけでなく、観劇前のイントロトーク、観劇後のポストトーク、ナビゲーターや参加者同士でのおしゃべり、交流会、記念撮影など、グループツアーならではの内容を盛り込む。各ツアーのナビゲーターには、清水知子 (文化理論、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授 / ツアーA)、平野暁人 (翻訳家・通訳 / ツアーB) を迎え、対話や交流を通じて参加者とともにシアターコモンズの体験を深めていく。このツアーを契機に、世代やジャンルを超えたアクティブな観客コミュニティが、あらたに生成されていくかもしれない。

定員

各ツアー30名 (先着順)

上演言語

日本語

アクセシビリティ

字幕言語 | なし 音声ガイド | なし
その他アクセシビリティ | 車椅子での参加可能

注意事項

- *本ツアーには食事の提供、宿泊・交通の手配および費用は含まれません。
- *休憩時間に飲食可能な場所等について、ご予約後にご案内いたします。
- *各会場間の移動は徒歩と電車を予定しています。交通系ICカードにチャージの上ご参加ください。
- *ツアースケジュールの詳細については変更が生じる場合がございます。詳細はご予約後にご案内いたします。

クレジット

主催 | シアターコモンズ実行委員会

プロフィール

清水知子 (しみず・ともこ) | 愛知県生まれ。現在、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授。専門は文化理論、メディア文化論。著書に『文化と暴力—揺曳するユニオンジャック』(月曜社)、『ディズニーと動物—王国の魔法をとく』(筑摩選書)、共訳書にジュディス・バトラ『アセンブリ——行為遂行性・複数性・政治』(青土社)、『非暴力の力』(青土社)、アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『叛逆』(NHK出版)、デイヴィッド・ライアン『9・11以後の監視』(明石書店)他。

平野暁人 (ひらの・あきひと) | 翻訳家 (日仏伊)。戯曲を中心に小説、精神分析、ノンフィクションまで幅広く手掛ける傍ら、舞台芸術専門の通訳者ならびに多言語パフォーマンスとして国内外で活動。主な訳書に『「ひとりではいられない」症候群』(講談社)、『隣人ヒトラー』(岩波書店)、『純粋な人間たち』(英治出版)など。2025年元旦、noteにて発表した詩的試論「もうすぐ消滅するという人間の翻訳について」が1週間で20万超のアクセスを記録。

The Commons Tour is an efficient way to enjoy multiple programs at Theater Commons Tokyo '25 during an intensive two-day group tour. The tour will be held on both weekends during the festival period and, in addition to tickets to the programs, offers activities only available for participants, including intros and post-performance talks, conversations with the guides and fellow tour goers, mixers, and photo ops. The tours are guided, respectively, by Tomoko Shimizu (cultural theory, professor of Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts / Tour A), Akihito Hirano (translator, interpreter / Tour B), who will help deepen the Theater Commons experience through conversation and exchange. The Commons Tour has the potential to create a new, active audience community that transcends generations and genres.

Capacity

30 persons per tour (first-come-first-served basis)

Language

Japanese

Accessibility

Subtitles | None Audio guide | None
Additional accessibility | Wheelchair participating available

Please note

- *Meals, accommodation, and travel costs are not included as part of the tour.
- *We will provide information on places to eat during break times once you reserve a ticket.
- *The travel between each venue will be possible by foot or train. Please charge your IC card in advance of participation.
- *Details of the tour schedule are subject to change. We will provide further details after you reserve a ticket.

Credit

Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee

Profile

Tomoko Shimizu | Born in Aichi. Professor of Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts. Her research interests are media and cultural theory. She is the author of *Culture and Violence: The Unravelling Union Jack* (Getsuyosha), and *Disney and Animals: Breaking the Spell of Magic Kingdom* (Chikuma Shobo). Her co-translation works include: *Notes Toward a Performative Theory of Assembly* by Judith Butler, *The Force of Nonviolence* by Judith Butler, *Declaration* by Antonio Negri and Michael Hart, and *Surveillance after September 11* by David Lyon.

Akihito Hirano | Translator (Japanese, French, Italian). He has worked mainly on plays, but also on novels, psychoanalysis, and nonfiction. He is also active in Japan and abroad as an interpreter specializing in the performing arts and as a multilingual performer. His translations include *The Inability to Be Alone* (Kodansha), *Hitler, My Neighbor* (Iwanami Shoten), *Of Pure Men* (Eiji Press, Inc.), etc. On New Year's Day 2025, he published a poetic essay about translation on his website, which received over 200,000 hits in one week.



会場

スパイラルホール

〒107-0062 港区南青山5-6-23 スパイラル 3F
東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道駅」
B1出口前、B3出口より徒歩1分

みなとコモンズ (旧三田図書館)

〒108-0014 港区芝5-28-4
JR「田町駅」三田口より徒歩5分、
地下鉄 都営三田線・浅草線「三田駅」
A3出口より徒歩2分

ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター

〒107-0052 港区赤坂7-5-56
Tel: 03-3584-3201
東京メトロ銀座線・半蔵門線／
都営大江戸線「青山一丁目駅」4 (北) 出口より徒歩7分

東京日仏学院 エスパス・イマージュ

〒162-8415 新宿区市谷船河原町15
東京日仏学院 2F
Tel: 03-5206-2500
JR「飯田橋駅」西口／
東京メトロ有楽町線・南北線・東西線B3出口より徒歩7分
都営大江戸線「牛込神楽坂駅」A2出口より徒歩7分

VENUES

Spiral Hall

3F Spiral, 5-6-23 Minami-Aoyama, Minato-ku,
Tokyo 107-0062
Omotesando Station (Tokyo Metro Ginza,
Hanzomon or Chiyoda Lines): In front of B1 Exit,
1 minute walk from B3 Exit

Minato Commons (Ex-Mita Library)

5-28-4 Shiba, Minato-ku, Tokyo 108-0014
Tamachi Station (JR):
5 minutes walk from West (Mita) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines):
2 minutes walk from A3 Exit

Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel: 03-3584-3201
Aoyama-itcho Station (Tokyo Metro Ginza or
Hanzomon Lines / Toei Oedo Line): 7 minutes walk
from 4 (North) Exit

Institut français de Tokyo, Espace images

2F Institut français de Tokyo, 15 Ichigaya-
Funagawara-machi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8415
Tel: 03-5206-2500
Iidabashi Station (JR West Exit / Tokyo Metro
Yurakucho, Namboku or Tozai Lines B3 Exit): 7
minutes walk
Ushigome-kagurazaka Station (Toei Oedo Line): 7
minutes walk from A2 Exit

スケジュール / SCHEDULE

■ コモンズ・ツアー
Commons Tour
■ コモンズ・フォーラム
Commons Forum

2025 **2** FEB

3 MAR

アーティスト／プログラム	21 FRI	22 SAT	23 SUN	24 MON	25 TUE	26 WED	27 THU	28 FRI	1 SAT	2 SUN
キュンチョメ 「ブレス・イン・ザ・ダーク — 平和のための呼吸—」 Kyun-Chome <i>Breath in the Dark for Peace</i>	16:00/19:00	16:00*/19:00 *リラックス パフォーマンスの回 *Relaxed performance	12:00/19:00	12:00/19:00				16:00/19:00	16:00/19:00	16:00*/19:00 *リラックス パフォーマンスの回 *Relaxed performance
佐藤朋子 「オバケ東京のためのインデックス 東アジア編」 Tomoko Sato <i>Index for Obake Tokyo: East Asia Chapter</i>	14:00		14:00	14:00				14:00	14:00	
ジョアナ・ハジトーマ&カリル・ジョレイジュ 「オルトシアのめくるめく物語」 Joana Hadjithomas and Khalil Joreige <i>The Vertiginous Story of Orthosia</i>				15:00 *ポストトークあり *Talk (after the performance)	17:00					
ジョアナ・ハジトーマ&カリル・ジョレイジュ 「スマイルナ」ほか Joana Hadjithomas and Khalil Joreige <i>ISMYRNA and more</i>							19:00 *ポストトークあり *Talk (after the screening)		11:30/16:30	11:30/13:30
メイ・リウ 「Homesick for Another World」 Mei Liu <i>Homesick for Another World</i>				18:00 *ポストトークあり *Talk (after the performance)	20:00					
ルネ・ポレシュ／ 小野彩加 中澤陽 スペースノットブランク 「あなたの瞳の奥を見抜きたい、 人間社会にありがちな目くらしの関係」 René Pollesch / Ayaka Ono Akira Nakazawa Spacenotblank <i>I'm looking into your eyes, social context of deception!</i>						19:00	17:00	14:00/17:00/19:30	12:00/15:00/18:00	15:00/18:00
市原佐都子/Q 「キティ」 Satoko Ichihara/Q <i>KITTY</i>									14:00/19:00	11:30/16:30
コモンズ・フォーラム #1 「演劇とケア」 Commons Forum #1 "Theater and Care"			16:00-18:00							
コモンズ・フォーラム #2 「演劇と社会」 Commons Forum #2 "Theater and Society"							19:00-21:00			
コモンズ・フォーラム #3 「演劇と東アジア」 Commons Forum #3 "Theater and East-Asia"										14:00-15:30
コモンズ・ツアー Commons Tour			ツアー A 1日目 Tour A Day 1 11:45-18:00	ツアー A 2日目 Tour A Day 2 11:45-21:30					ツアー B 1日目 Tour B Day 1 13:15-17:10 / 13:15-20:10	ツアー B 2日目 Tour B Day 2 10:45-20:15

クレジット

シアターコモンズ '25

シアターコモンズ実行委員会

委員長 | 相馬千秋 (特定非営利活動法人芸術公社 代表理事)
副委員長 | 大館奈津子 (特定非営利活動法人芸術公社 理事)
委員 | サンソン・シルヴァン (在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ 文化担当官)
委員 | バス・ヴァルクス (オランダ王国大使館 広報・政治・文化部 副部長)
監事 | 須田洋平 (弁護士)

シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター | 相馬千秋 (芸術公社)
制作・事務局統括 | 清水聡美 (芸術公社)
制作 | 山里真紀子、芝田遥、阿部幸、
谷口裕子、藤崎春花、吉岡直哉 (いずれも芸術公社)
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣、鈴木理映子 (芸術公社)
広報 | 岩本室佳 (芸術公社)
翻訳 | 水野 響、リリアン・キャンライト、内山もにか (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
ウェブデザイン | 加藤賢策、伊藤博紀 (LABORATORIES)
インターン | 欧静薇、岡田結実、小栗舞花、小沢日菜、柏原瑚子、
関口真生、橋本佑月、宮原朱琳
アクセシビリティアドバイザー | 田中みゆき
経理税務アドバイザー | 山内真理 税務士事務所
法務アドバイザー | 須田洋平 (弁護士 / 芸術公社)

シアターコモンズ'25 技術スタッフ

舞台監督 | ラング・クレイグヒル
照明 | 山下恵美、帆足ありあ、伊丹帆乃子 (RYU)
音響 | 稲荷森健
映像 | 佐藤佑樹 (エディスグローヴ)
記録映像・写真 | 山口雄太郎

シアターコモンズ '25

発行日 | 2025年2月21日
執筆 | シアターコモンズ実行委員会
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
翻訳 | Art Translators Collective
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
デザイン | 和田真季 (LABORATORIES)
発行 | シアターコモンズ実行委員会
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

禁断複製・転用 ©シアターコモンズ実行委員会 2025

CREDIT

Theater Commons Tokyo '25

Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson | Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)
Vice-chairman | Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)
Member | Samson Sylvain (Attaché culturel, Embassy of France in Japan / Institut français du Japon)
Member | Bas Valckx (Deputy Head Public Diplomacy, Political, Cultural Affairs, Embassy of the Kingdom of the Netherlands)
Auditor | Yohei Suda (Lawyer)

Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director | Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)
Production Manager and Coordinator | Satomi Shimizu (Arts Commons Tokyo)
Project Coordinator | Makiko Yamazato, Haruka Shibata, Sachi Abe, Yuko Taniguchi, Haruka Fujisaki, Naoya Yoshioka (Arts Commons Tokyo)
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba, Rieko Suzuki (Arts Commons Tokyo)
PR | Sayaka Iwamoto (Arts Commons Tokyo)
Translation | Hibiki Mizuno, Lillian Canright, Monika Uchiyama (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Web Design | Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)
Intern | Ou Jingwei, Yumi Okada, Maika Oguri, Hina Ozawa, Coco Kashiwara, Mao Sekiguchi, Yuzuki Hashimoto, Shurin Miyahara
Accessibility adviser | Miyuki Tanaka
Accounting Adviser | Yamauchi-Accounting-Office
Legal Adviser | Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)

Theater Commons Tokyo '25 Technical Staff

Stage Manager | Lang Craighill
Lighting | Megumi Yamashita, Aria Hoashi, Honoko Itami (RYU)
Sound | Takeshi Inarimori
Movie | Yuki Sato (Edith Grove)
Documentation Video and Photography | Yutaro Yamaguchi

Theater Commons Tokyo '25

Date of Issue | February 21st, 2025
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation | Art Translators Collective
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Design | Maki Wada (LABORATORIES)
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

©Theater Commons Tokyo Executive Committee 2025. All rights reserved.

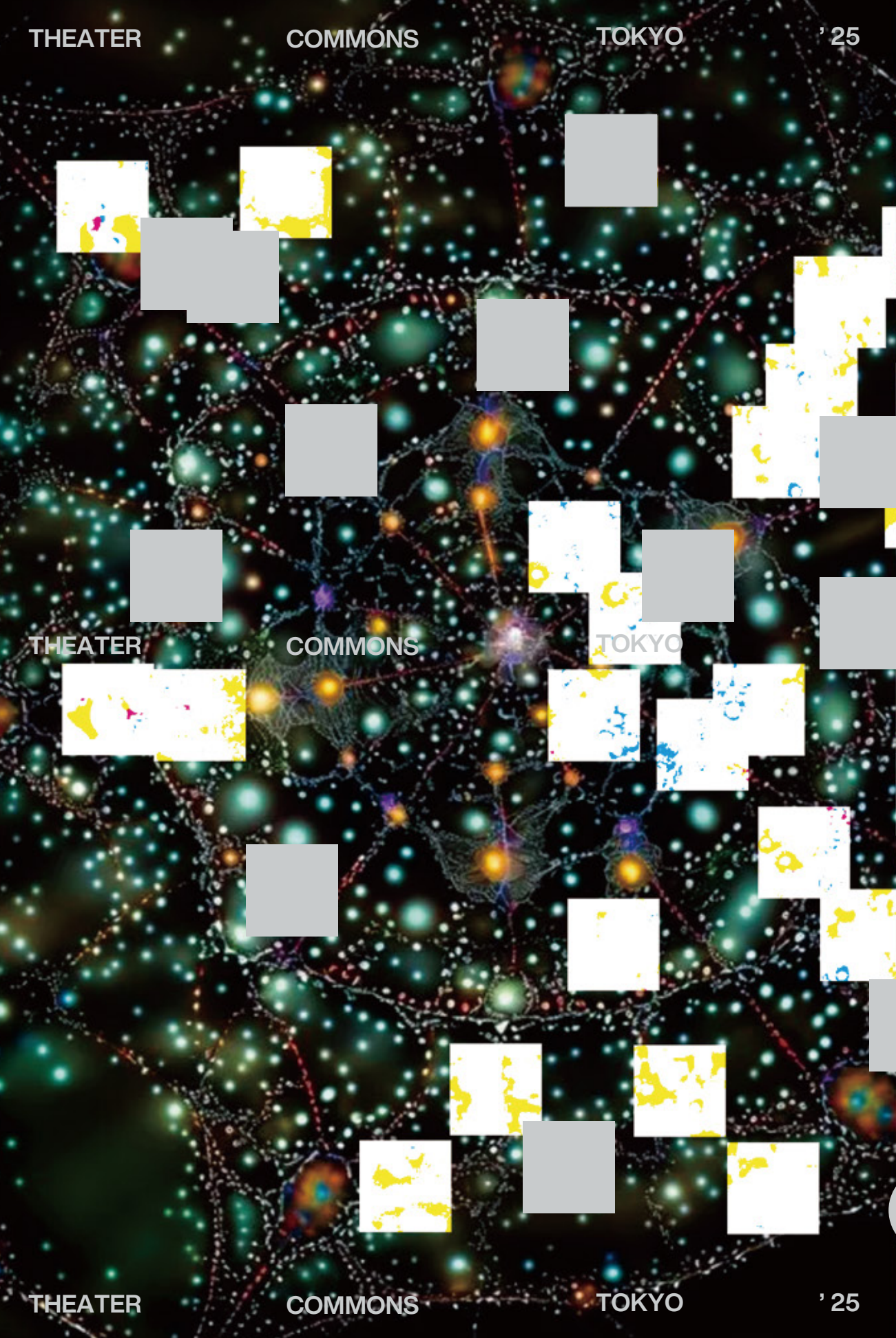


THEATER

COMMONS

TOKYO

'25



THEATER

COMMONS

TOKYO

THEATER

COMMONS

TOKYO

'25